

〔原著〕

山形県立保健医療短期大学看護学科卒業生の動向（第2報）

就業上の困りごと，誇りに思うことを中心に

青 木 実 枝・後 藤 順 子・佐 藤 幸 子
遠 藤 恵 子・遠 藤 芳 子The trend of the alumni of Yamagata School of
Health Science (The 2nd Report)An investigation into the actual state of the alumni of Yamagata School of
Health Science, focus on the perplexities in working and the boasts

Mie AOKI, Junko GOTO, Yukiko SATO, Keiko ENDO, Yoshiko ENDO

Abstract :

Purpose : To investigate the clinical subjects, the boasts, and the expectations for our school as alumni.

Method : We investigated by the original questionnaires referring to the antecedent research. The contents of this investigation are the perplexities in working, the meanings of working, and their boasts and the expectations for our school as alumni.

Conclusion : There are many answers that they don't feel perplexities in working so much, and they demonstrated their due developments in the course. They strongly recognized the significance of their jobs for their self-improvement and they were proud of the acquisition of wide knowledge, the technical arts, and the ethical consideration as alumni. We think that they hope alma mater for more practical lectures, and continuous supports by our school for their professional research and their further developments.

Key Words : nursing education, subjects of alumni, supports after graduation

はじめに

第1報でも述べたように，山形県立保健医療短期大学（以下，本短期大学）は平成12年に保健医療大学に移行した。今後，4年制大学として山形県立保健医療大学（以下，本大学）が求められる個性を考えるために調査を行った¹⁾。第1報では本短期大学卒業生の動向と，学内で学習した演習内容の評価を行った。今回は，本短期大学卒業生の

就業上の困りごと，誇りに感じていること，母校への期待に焦点をあて分析し本大学の役割を明確にしたいと考えた。

研究目的

- 1．卒業生が臨床の場で抱えている課題を明らかにする
- 2．卒業生が本短期大学に対して誇りに感じていることを明らかにする
- 3．卒業生が本大学に対して期待していることを明らかにする

研究方法

対象者：本短期大学看護学科平成12～14年3

1) 山形県立保健医療大学 保健医療学部 看護学科
〒990-2212 山形市上柳 260
Department of Nursing, Yamagata Prefectural University
of Health Sciences
260 Kamiyanagi, Yamagata 990-2212, Japan

月の卒業生で、卒業後逝去した2人を除く283人¹⁾

調査期間:平成15年2月20日~3月31日

調査内容:先行研究²⁻⁹⁾を参考にして独自に作成した質問紙を用い、自記式とした。プレテスト後、卒業時の実家の住所に依頼文書、調査用紙、返信用封筒を郵送し、回答後、郵送にて回収した¹⁾。質問内容は、就業上の困りごと、仕事を持つことの意味、誇りに感じていること、本大学に期待することの項目について各々択一式質問項目と自由記載欄を設けた。

1. 就業上の困りごと

仕事をする上での困りごとについて13質問項目と、職場環境での困りごとについて8質問項目を設定した。それぞれの選択肢は(大変そう思う4点)から(全くそう思わない1点)までの4択とした。

2. 仕事を持つことの意味

「仕事」を持つことはどんな意味をもつかについて、先行研究³⁻⁵⁾に基づき9質問項目を設定した。選択肢は(大いに関係がある5点)から(全く関係ない1点)までの5択である。

3. 誇りに感じていること

- 1) 看護職として働くことを誇りに思うかについて、(大変誇りに思う4点)から(全く誇りに思わない1点)まで4選択肢を設定した。
- 2) 本短期大学の卒業生として誇りに感じていることについて13質問項目を設定し、選択肢は(大変誇りに思う4点)から(全く誇りに思わない1点)までの4択とした。

4. 本大学に期待すること

本大学に期待することについて18質問項目を設定し、選択肢は(大変そう思う4点)から(全くそう思わない1点)まで4択とした。

倫理的配慮

調査の目的とプライバシーの保護および調査を拒否できることを明記した調査依頼書を同封し、調査は無記名で、回答後の調査用紙は封書で返送してもらった。

結 果

回答数は103で回収率は43.3%であった。対象者の平均年齢は23.3 ± 1.3歳であった¹⁾。専攻科を含めた最終的な卒業年は、平成12年3月27人、13年3月39人、14年3月37人であった。

卒業直後の進路は進学25人(24.3%)、就職72人(69.9%)だった。主な就職先は、病院65人であった。現在従事している者84人の職種は、看護師74人、保健師4人、助産師2人、等であった¹⁾。

1. 就業上の困りごと

1) 仕事をする上での困りごと

対象者全体の回答は、13質問項目中、11項目が最頻値2(あまりそう思わない)であった。他は、「知識に自信がもてない」と、「技術に自信がもてない」が最頻値3(ややそう思う)であった。平均値は高い順に、「知識に自信がない」(3.27)、「技術に自信がない」(3.24)、「何をするにも人より時間がかかる」(2.66)であった。平均値の低い項目は、「何を勉強すべきかわからない」(2.21)、「意見を同僚や上司に話すことができない」(2.24)、「どうやって勉強したらよいかかわからない」(2.31)、「看護者としての責任を果たせない」(2.32)であった(表1)。

卒業年別の比較では、平成12年3月卒業生(以下、12年卒業生)は、「知識に自信がもてない」と「計画に沿った看護介入ができない」の項目が他の卒業生よりやや高値を示した。平成13年3月卒業生(以下、13年卒業生)は、「どうやって勉強したらよいかかわからない」と「看護上の問題点を明らかにできない」および「看護診断ができない」の項目が他の卒業生よりやや高値を示した。平成14年3月卒業生(以下、14年卒業生)は、「技術に自信がもてない」と「何をするにも人より時間がかかる」、「何を勉強すべきかわからない」、「評価やフィードバックができない」および「看護者としての責任を果たせない」の項目が他の卒業生より高値を示した(図1)。

自由記載は16名からあった。その内容は、基礎教育で学んでいない事が要求される又は活用できない(5件)、看護を正しくできているか不安(4件)、学生時代の学習姿勢の反省(3件)、自分の成長を感じている(2件)等であった。

表1 仕事をする上での困りごと

人(%)

	大変そう 思う	ややそう 思う	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	合 計	平均 (SD)
1) 知識に自信がもてない	36 (38.3)	48 (51.1)	9 (9.6)	1 (1.1)	94 (100)	3.27 (0.67)
2) 技術に自信がもてない	33 (35.1)	51 (54.3)	10 (10.6)	0 (0.0)	94 (100)	3.24 (0.63)
3) 意見を同僚や上司に話すことができない	6 (6.4)	23 (24.5)	53 (56.4)	12 (12.8)	94 (100)	2.24 (0.76)
4) 何をするにも人より時間がかかる	17 (18.1)	30 (31.9)	45 (47.9)	2 (2.1)	94 (100)	2.66 (0.80)
5) 何を勉強するべきかわからない	5 (5.4)	23 (25.0)	50 (54.3)	14 (15.2)	92 (100)	2.21 (0.76)
6) どうやって勉強したらよいかわからない	6 (6.4)	29 (30.9)	47 (50.0)	12 (12.8)	94 (100)	2.31 (0.78)
7) 看護に必要な情報収集が適切にできない	4 (4.3)	34 (36.6)	51 (54.8)	4 (4.3)	93 (100)	2.41 (0.65)
8) 看護上の問題点を明らかにできない	6 (6.5)	34 (36.6)	51 (54.8)	2 (2.2)	93 (100)	2.47 (0.65)
9) 看護診断ができない	8 (8.7)	36 (39.1)	48 (52.2)	0 (0.0)	92 (100)	2.57 (0.65)
10) 看護介入計画が立案できない	7 (7.6)	28 (30.4)	56 (60.9)	1 (1.1)	92 (100)	2.45 (0.65)
11) 計画に沿った看護介入ができない	5 (5.4)	28 (30.4)	55 (59.8)	4 (4.3)	92 (100)	2.37 (0.66)
12) 評価やフィードバックができない	6 (6.5)	31 (33.7)	51 (55.4)	4 (4.3)	92 (100)	2.42 (0.68)
13) 看護者としての責任を果たせない	6 (6.6)	24 (26.4)	54 (59.3)	7 (7.7)	91 (100)	2.32 (0.71)

N = 103

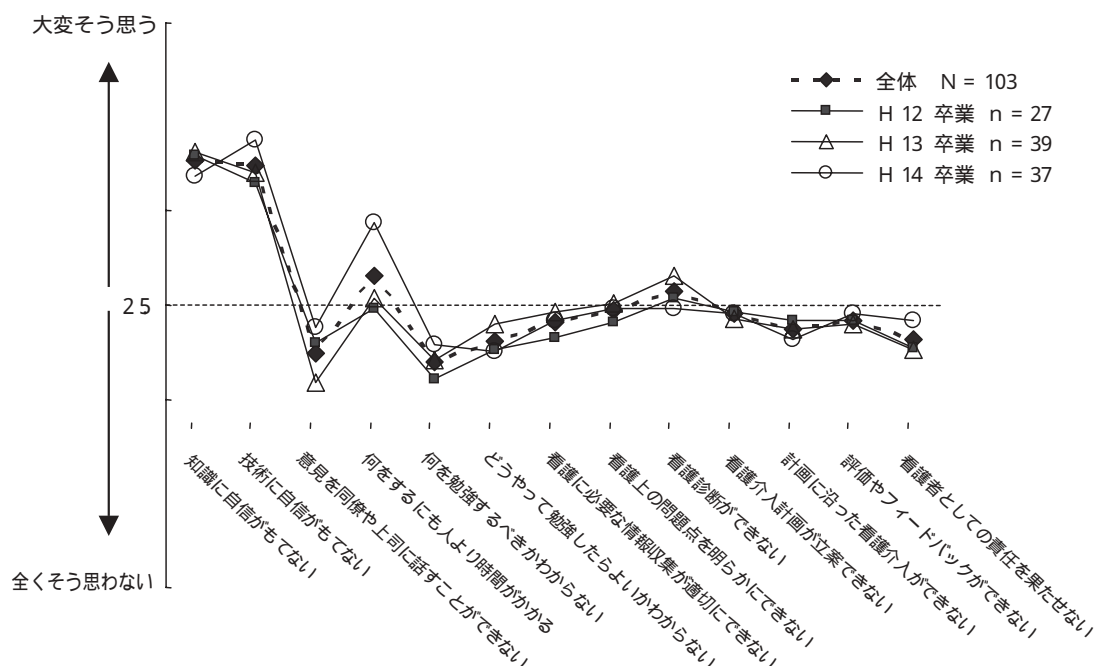


図1 卒業年別 仕事をする上での困りごと

2) 職場環境での困りごと

対象者全体の回答は, 8 質問項目中, 6 項目が最頻値 2 (あまりそう思わない) であった。他は, 「自分を担当する指導者がいない」が最頻値 1 (全くそう思わない), 「施設内に図書や資料が不足している」が最頻値 3 (ややそう思う) であった。平均値は高い順に「施設内に図書や資料が不足している」(3.02), 「自分の能力に比べ割り当てられる業務量が多い」(2.73), 「自分の理想とする看護

をさせてもらえない」(2.52) であった。平均値の低い項目は, 「自分を担当する指導者がいない」(1.83), 「誰に相談したらよいかわからない」(1.97), 「研修会がない」(2.05) であった (表 2)。

卒業年別の比較では, 12 年卒業生は, 「自分の能力に比べ割り当てられる業務量が多い」の項目が他の卒業生より高値を示した。13 年卒業生は, 「自分の理想とする看護をさせてもらえない」と「自分を担当する指導者がいない」, 「自分に対する

表2 職場環境での困りごと

人(%)

	大変そう 思う	ややそう 思う	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	合 計	平均(SD)
1) 自分の能力に比べ割り当てられる業務量が多い	18 (20.5)	32 (36.4)	34 (38.6)	4 (4.5)	88 (100)	2.73 (0.84)
2) 自分の理想とする看護をさせてもらえない	10 (11.5)	31 (35.6)	40 (46.0)	6 (6.9)	87 (100)	2.52 (0.79)
3) 自分を担当する指導者がいない	4 (4.5)	15 (17.0)	31 (35.2)	38 (43.2)	88 (100)	1.83 (0.87)
4) 自分に対する指導方法がまちまちである	7 (8.0)	29 (33.0)	35 (39.8)	17 (19.3)	88 (100)	2.30 (0.87)
5) 研修やレポートが多い	8 (9.1)	17 (19.3)	40 (45.5)	23 (26.1)	88 (100)	2.11 (0.90)
6) 研修会がない	9 (10.2)	11 (12.5)	43 (48.9)	25 (28.4)	88 (100)	2.05 (0.91)
7) 誰に相談したらよいかわからない	4 (4.5)	16 (18.2)	41 (46.6)	27 (30.7)	88 (100)	1.97 (0.82)
8) 施設内に図書や資料が不足している	30 (34.5)	35 (40.2)	16 (18.4)	6 (6.9)	87 (100)	3.02 (0.90)

N = 103

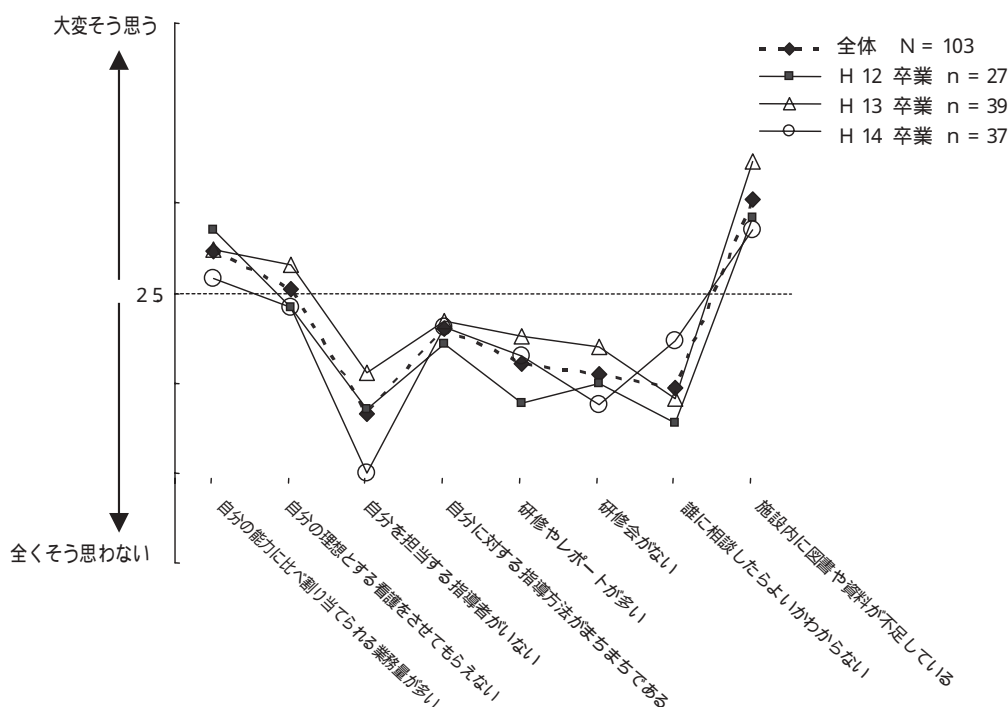


図2 卒業年別 職場環境での困りごと

指導方法がまちまちである」,「研修やレポートが多い」,「研修会がない」および「施設内に図書や資料が不足している」の6項目が他の卒業生より高値を示した。14年卒業生は,「誰に相談したらよいかわからない」の項目が他の卒業生より高値を示した(図2)。

自由記載は17名からあった。その内容は 研修や学習する環境および内容が不十分(7件),業務に追われ時間的な余裕がない(5件),人間関係に戸惑い(4件),基礎教育で学んだことが役立っている,自分の未熟さを実感した,仕事がつまらない(各1件)等であった。

2. 仕事を持つことの意味

対象者全体の回答は,「自分が成長する」と「自立感を得る」が最頻値5(大いに関係がある),「家族が望んでいる」と「職場の期待にこたえる」,「新しい知識を得る」,「経済的に楽になる」および「仲間ができる」の4項目が最頻値4(関係ある)であり,「看護の発展に貢献する」と「社会的地位を得る」が最頻値3(いくらか関係ある)であった。平均値は高い順に,「自分が成長する」(4.49),「自立感を得る」(4.18),「新しい知識を得る」(4.17)であった。平均値の低い項目は,「看護の発展に貢献する」(2.92),「家族が望んでいる」(3.14),「職場の期待にこたえる」(3.33)であった(表3)。

表3 「仕事」を持つことの意味

人（％）

	大いに 関係ある	関係ある	いづ からか 関係ある	殆 ど 関係ない	全 く 関係ない	合 計	平均（SD）
1）家族が望んでいる	13（13.3）	28（28.6）	27（27.6）	20（20.4）	10（10.2）	98（100）	3.14（1.19）
2）職場の期待にこたえる	4（4.1）	42（42.9）	37（37.8）	12（12.2）	3（3.1）	98（100）	3.33（0.86）
3）看護の発展に貢献する	6（6.1）	18（18.4）	39（39.8）	32（32.7）	3（3.1）	98（100）	2.92（0.94）
4）新しい知識を得る	39（39.8）	40（40.8）	17（17.3）	1（1.0）	1（1.0）	98（100）	4.17（0.83）
5）自分が成長する	58（59.2）	31（31.6）	8（8.2）	1（1.0）	0（0.0）	98（100）	4.49（0.69）
6）自立感を得る	42（42.9）	37（37.8）	14（14.3）	5（5.1）	0（0.0）	98（100）	4.18（0.87）
7）社会的地位を得る	21（21.4）	25（25.5）	28（28.6）	16（16.3）	8（8.2）	98（100）	3.36（1.22）
8）経済的に楽になる	36（36.7）	43（43.9）	13（13.3）	5（5.1）	1（1.0）	98（100）	4.10（0.89）
9）仲間ができる	35（35.7）	36（36.7）	23（23.5）	4（4.1）	0（0.0）	98（100）	4.04（0.87）

N = 103

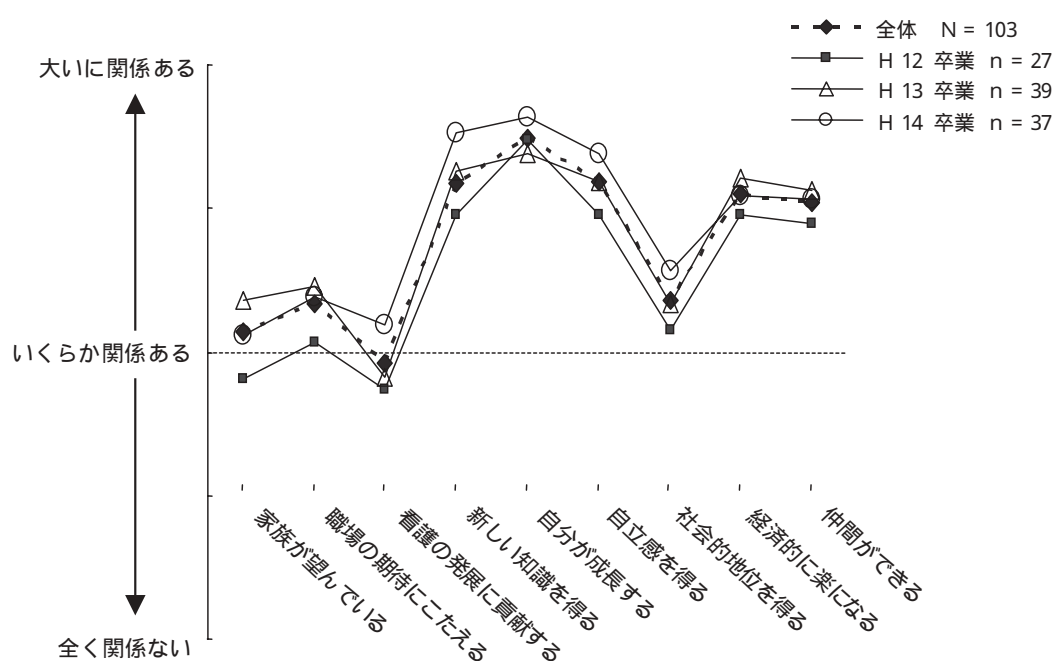


図3 卒業年別「仕事」を持つことの意味

卒業年別の比較では、12年卒業生が他の卒業生より高値を示した項目はなかった。13年卒業生は、「家族が望んでいる」と「職場の期待にこたえる」、「経済的に楽になる」および「仲間ができる」の項目が他の卒業生より高値を示した。14年卒業生は、「新しい知識を得る」（ $p < 0.05$ ）と「自分が成長する」、「自立感を得る」および「社会的地位を得る」の項目が他の卒業生より高値を示した（図3）。

自由記載は6名からあった。その内容は、学ぶことが多く自分が成長できる（3件）、自分の生活の支え（2件）、社会に役立つ、女性の仕事として確立している（各1件）であった。

3. 誇りに感じていること

1) 看護職として働くことへの誇り

対象者全体の回答では、5選択肢中「大変誇りに思う」と「やや誇りに思う」で88名（91.70％）を占め、「全く誇りに思わない」は0名であった（図4）。

卒業年別の比較では、14年卒業生が最も誇りに思っていた（図4）。

2) 本短期大学の卒業生として誇りに感じていること

対象者全対の回答は、13質問項目中、12項目が最頻値3（やや誇りに思う）であり、「同窓生とのネットワークが充実している」が最頻値2（あま

り誇りに思わない)であった。平均値は高い順に、「幅広い知識を得ることができた」(3.27),「専門的知識を得ることができた」(3.19),「倫理的な配慮を覚えることができた」と「広い視野を持てるようになった」(いずれも 3.16),「人間関係を形成する技術を得ることができた」(3.15)であった。平均値の低い項目は「同窓生とのネットワークが充実している」(2.54),「学習意欲が高い」(2.75),「自分に対する厳しさを身につけることができた」(2.85),「同級生とのネットワークが充実している」(2.89)であった(表4)。

卒業年別の比較では,14年卒業生が全ての質問項目で他の卒業生より高値を示した。「専門的知識を得ることができた」($p < 0.01$)と「幅広い知識を得ることができた」($p < 0.05$),「人間関係を形

成する技術を得ることができた」($p < 0.01$),「倫理的な配慮を覚えることができた」($p < 0.05$),「自分に対する厳しさを身につけることができた」($p < 0.05$),「広い視野を持てるようになった」($p < 0.05$),「教員との交流がある」($p < 0.01$)および「事務の対応が良い」($p < 0.05$)の8項目で有意差があった(図5)。

自由記載は16名からあった。その内容は「講義内容が充実しており幅広い知識が得られた(2件)に対して1期生からはカリキュラムが不十分だった(1件)があった。他には,患者を尊重する姿勢が身についた,卒業研究が職場で役立っている,設備が充実している(各2件),卒業後もサポートを受けている,自主性が身についた,3学科の学生と一緒に学べた(各1件)等であった。

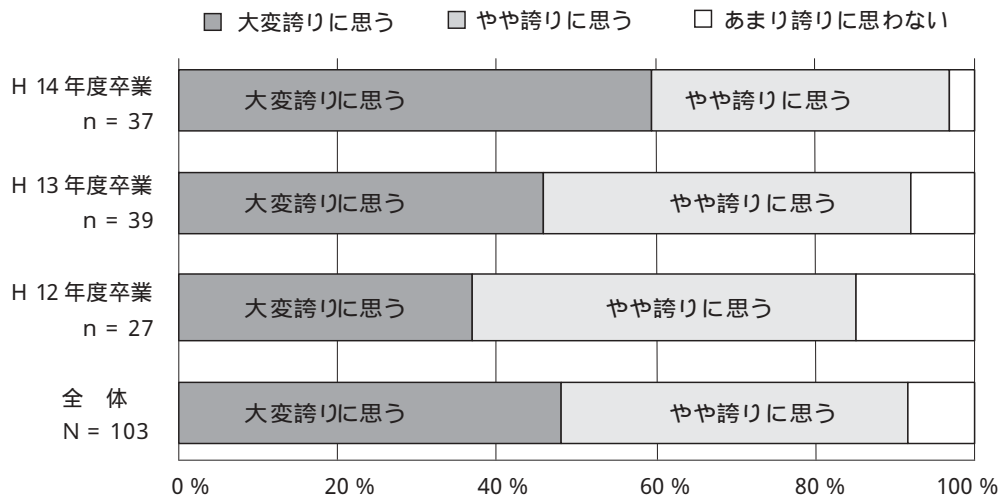


図4 看護職として働くことへの誇り

表4 卒業生として誇りに感じる事

人(%)

	大変誇りに思う	やや誇りに思う	あまり誇りに思わない	全く誇りに思わない	合 計	平均 (SD)
1) 専門的知識を得ることができた	31 (30.4)	59 (57.8)	12 (11.8)	0 (0.0)	102 (100)	3.19 (0.63)
2) 幅広い知識を得ることができた	38 (37.3)	54 (52.9)	10 (9.8)	0 (0.0)	102 (100)	3.27 (0.63)
3) 確実な日常生活援助技術を得ることができた	25 (24.5)	55 (53.9)	22 (21.6)	0 (0.0)	102 (100)	3.03 (0.68)
4) 人間関係を形成する技術を得ることができた	33 (32.4)	52 (51.0)	16 (15.7)	1 (1.0)	102 (100)	3.15 (0.71)
5) 学習意欲が高い	13 (12.7)	57 (55.9)	26 (25.5)	6 (5.9)	102 (100)	2.75 (0.75)
6) 倫理的な配慮を覚えることができた	28 (27.5)	62 (60.8)	12 (11.8)	0 (0.0)	102 (100)	3.16 (0.61)
7) 柔軟な考えを身につけることができた	23 (22.5)	57 (55.9)	21 (20.6)	1 (1.0)	102 (100)	3.00 (0.69)
8) 自分に対する厳しさを身につけることができた	21 (20.6)	48 (47.1)	30 (29.4)	3 (2.9)	102 (100)	2.85 (0.78)
9) 広い視野を持てるようになった	32 (31.4)	56 (54.9)	12 (11.8)	2 (2.0)	102 (100)	3.16 (0.70)
10) 同級生とのネットワークが充実している	25 (24.5)	44 (43.1)	30 (29.4)	3 (2.9)	102 (100)	2.89 (0.81)
11) 同窓生とのネットワークが充実している	10 (9.8)	42 (41.2)	43 (42.2)	7 (6.9)	102 (100)	2.54 (0.77)
12) 教員との交流がある	28 (27.5)	49 (48.0)	23 (22.5)	2 (2.0)	102 (100)	3.01 (0.76)
13) 事務の対応が良い	25 (25.0)	51 (51.0)	22 (22.0)	2 (2.0)	100 (100)	2.99 (0.75)

N = 103

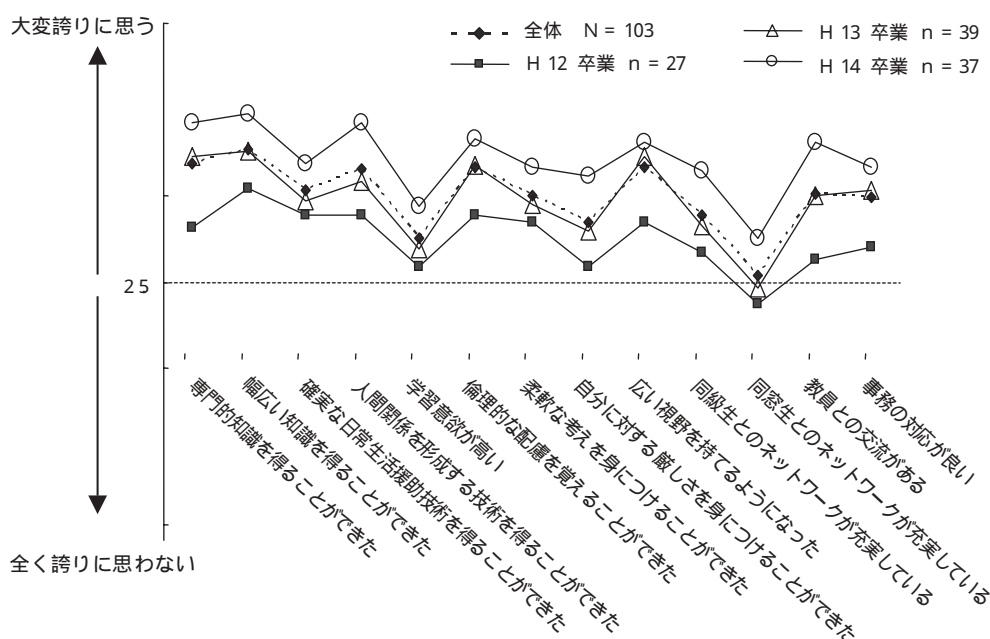


図5 卒業年別 卒業生として誇りに感じる事

表5 大学に期待すること

人(%)

	大 変 そ う 思 う	や や そ う 思 う	あ ま り そ う 思 わ な い	全 く そ う 思 わ な い	合 計	平均 (SD)
1) 学内の行事や主な活動を広報して欲しい	24 (24.2)	55 (55.6)	20 (20.2)	0 (0.0)	99 (100)	3.04 (0.67)
2) 図書館の図書を増やして欲しい	29 (28.7)	50 (49.5)	21 (20.8)	1 (1.0)	101 (100)	3.06 (0.73)
3) 図書館を休日も開館して欲しい	59 (58.4)	34 (33.7)	8 (7.9)	0 (0.0)	101 (100)	3.51 (0.64)
4) 体育館や実習室などの施設を開放して欲しい	23 (22.8)	47 (46.5)	29 (28.7)	2 (2.0)	101 (100)	2.90 (0.77)
5) 公開講座の回数を多くして欲しい	29 (28.7)	48 (47.5)	23 (22.8)	1 (1.0)	101 (100)	3.04 (0.75)
6) 公開講座はもっと広いテーマで開催して欲しい	22 (22.0)	45 (45.0)	32 (32.0)	1 (1.0)	100 (100)	2.88 (0.76)
7) 夜間や休日も事務窓口を開いて欲しい	13 (13.0)	29 (29.0)	55 (55.0)	3 (3.0)	100 (100)	2.52 (0.76)
8) 卒業生を支援する窓口を開設して欲しい	36 (35.6)	51 (50.5)	13 (12.9)	1 (1.0)	101 (100)	3.21 (0.71)
9) 卒業生の進路相談を行って欲しい	25 (24.8)	56 (55.4)	20 (19.8)	0 (0.0)	101 (100)	3.05 (0.67)
10) 卒業生の研究支援を行って欲しい	34 (33.7)	56 (55.4)	11 (10.9)	0 (0.0)	101 (100)	3.23 (0.63)
11) 講義に実践的な内容を盛り込んで欲しい	57 (56.4)	38 (37.6)	6 (5.9)	0 (0.0)	101 (100)	3.51 (0.61)
12) 夜間や休日も開講して欲しい	17 (16.8)	26 (25.7)	52 (51.5)	6 (5.9)	101 (100)	2.53 (0.84)
13) リカレント教育など卒業後継続教育を充実して欲しい	30 (30.0)	59 (59.0)	11 (11.0)	0 (0.0)	100 (100)	3.19 (0.61)
14) 臨床や地域と合同の学習会を開催して欲しい	35 (34.7)	52 (51.5)	14 (13.9)	0 (0.0)	101 (100)	3.21 (0.67)
15) 臨床や地域と共同研究を行って欲しい	18 (17.8)	56 (55.4)	27 (26.7)	0 (0.0)	101 (100)	2.91 (0.66)
16) 大学院を開設して欲しい	23 (22.8)	48 (47.5)	30 (29.7)	0 (0.0)	101 (100)	2.93 (0.72)
17) 研究機関として発展して欲しい	37 (36.6)	46 (45.5)	17 (16.8)	1 (1.0)	101 (100)	3.18 (0.74)
18) 同窓会活動を活性化して欲しい	25 (24.8)	56 (55.4)	18 (17.8)	2 (2.0)	101 (100)	3.03 (0.71)

N = 103

4. 本大学に期待すること

18 質問項目中, 14 項目が最頻値 3 (ややそう思う) であった。他は, 「図書館を休日も開館して欲しい」と「講義に実践的な内容を盛り込んでほしい」が最頻値 4 (大変そう思う) であり, 「夜間や休日も事務窓口を開いて欲しい」と「夜間や休日も開講して欲しい」が最頻値 2 (あまりそう思わない) であった。平均値は高い順に, 「講義に実践的な内容を盛り込んでほしい」(3.51), 「図書館を

休日も開館して欲しい」(3.51), 「卒業生の研究支援を行って欲しい」(3.23), 「卒業生を支援する窓口を開設して欲しい」(3.21), 「臨床や地域と合同の学習会を開催して欲しい」(3.21) であった。平均値の低い項目は, 「夜間や休日も事務窓口を開いて欲しい」(2.52), 「夜間や休日も開講して欲しい」(2.53), 「公開講座はもっと広いテーマで開催して欲しい」(2.88), 「体育館や実習室などの施設を開放して欲しい」(2.90) であった (表 5)。

考 察

1. 就業上の困りごと

本調査の対象者の特徴は卒業してまもなく就業年数が3年未満の集団である。したがって、日々の業務を覚えることに精一杯の状況にあると推察される。

そのような状況の中で、仕事をする上での困りごと、および職場環境での困りごとともに（あまりそう思わない）の解答が多ことや、自由記載内容の“大変良い先輩、医師に恵まれ学習環境として大変良い”等は、就業上切実に困っている様子はなく、職場環境の非熟練者に対する教育体制が整っていることが伺えた。また、“レポート提出が多いので学んだことがとても役にたっています”等の自由記載内容に示されるように、卒業生自身も基礎教育で得た知識を活用している様子が伺え、専門職者として順調に成長しつつあると思われる。卒業生が、やや困っていると感じている知識や技術に対しては、第1報においても演習内容が実践とかけ離れている項目が抽出されており¹⁾、この結果と合わせて基礎教育内容の検討が課題である。

卒業年別には、就業年数1年目の「何を勉強すればいいのかわからない」や「誰に相談したらよいかかわからない」等、漠然とした内容にやや高値を示しており、他の卒業生より戸惑いが大きく自分にあった学習方法が見出せない様子が伺えた。就業年数2年目は、他の卒業生と比較してより多くの質問項目に高値を示した。これらは日常業務の中で責任ある役割を担当するとともに、“2年目になってからは次の新人が入ってきたこともあり1年間だけの指導者という感じを受けた”等の自由記載内容で裏付けられるように、先輩ナースの指導から離れ自立することへの戸惑いを示すものであると考えられる。就業年数3年目は自由記載内容でも、“業務が多く、それをこなすことのみで精一杯である”、“看護できている気がしない”、“本当に患者の個性に合わせて計画できているか不安を感じる”、“アセスメント、問題点の明確化に時間をかけることができず個性のある看護計画の立案ができずにいる”等、他の卒業生と比較して具体的なケアの内容に困っている様子が明らかになった。就業年数別に有意差がなかったものの、戸惑いが漠然とした事柄から具体的で個性のあ

るケア内容へと、徐々に実践的な事柄に移行する様子は、看護職者として自立するプロセスにある職員の教育プログラムのあり方や本大学の支援のあり方を検討する上で示唆に富んでいる。

2. 仕事を持つことの意味

同様の調査を行っている他校の卒業生より全般的に平均値が高く^{3・5)}仕事を持つことの意識が強いと言えるが、調査時点の社会状況や就業年数なども含めて更に分析を深める必要がある。しかし、比較的最近調査した日本赤十字愛知短期大学の卒業生は、自分自身の考えよりも家族や社会が看護職をどのように認知しているかに意味を求めている⁵⁾ことと比較し、本短期大学の卒業生は社会的地位を得ることに対する意味づけは低く、「自分が成長する」、「自立感を得る」、「新しい知識を得る」に対して意味を見いだしている傾向にある。自由記載の“患者さんから色々学ぶことが多く人間的に成長できる仕事だと思います”、“仕事によって多くの人々と出会える素晴らしさがある”等の内容でも裏付けられるように、本短期大学の卒業生は他者との関係や社会における認知よりも、自分自身の成長を看護職に求めていることが明らかになった。自己の成長に関する意識が高まった背景には、在学中から4年生大学移行への準備が行われるとともに、13年卒業生と14年卒業生は同じ校舎内で本大学の学生と共に学んでいることが影響していると思われる。第1報においても卒業生は上昇志向が高い¹⁾と報告したように、自己成長に関する意識が高く、本大学の役割の一つとして卒業生の成長を支援するための機会を提供することが考えられる。

3. 誇りに感じていること

1) 看護職として働くことへの誇り

仕事を持つことの意味において、卒業生は自分自身が成長できる職業として看護職を認知していることを裏づけるように、看護職として働くことに誇りを持って従事していることが明らかになった。

2) 本短期大学の卒業生として誇りに感じる

本短期大学は、医療や社会の変化に対応できる技術者の育成を目指し、人としての権利を尊重できる、幅広い知識・技術を備える、自ら学ぶ精神

と態度を身につける，自ら考え積極的に実践できることを目標として教育を行ってきた。本短期大学の卒業生として強く誇りに感じていることとして上位を占めた，「幅広い知識を得ることができた」，「専門的知識を得ることができた」，「倫理的な配慮を覚えることができた」，「広い視野を持てるようになった」，「人間関係を形成する技術を得ることができた」は教育目標に忠実に教育が実践された結果であると思われる。

卒業年別では，母校をまだ身近な存在として感じている14年卒業生が，全ての項目においてより強く誇りを感じていることが明らかになった。母校への帰属意識の強さが反映されたものと推測される。一方，教育を提供している教員側も短期大学開設とともに4年制大学への移行準備など流動的で複雑な時期であったが，教育の中核となる要素は年々充実された結果が現れたと考えられる。特に卒業年別に有意差があった8項目は本短期大学の前述のような教育目標に直結する内容と教職員の努力の結果を現すものであり，本短期大学が妥当な方向へ進んできたと思う。自由記載内容からも，12年卒業生の“1期生ということもありカリキュラムや講義内容があまり充実していなかったような”から，その後の卒業生の“トリアージ等の演習や講演の内容が充実しており様々な面で活用できる”，“卒業研究をやれたことが自分の自信にもなったし知識という意味でも役に立っている”，“卒業後も様々なかたちで卒業生をサポートしていただいて大変感謝しています”等からも裏づけることが出来る。

今後も卒業生が誇りに感じている教育内容や教職員の交流や対応に関して，期待に応えられるように努力することが求められている。

一方，学生の学習意欲を高める努力や同窓生とのネットワークに関しては今後の課題である。

4．大学に期待すること

卒業生の自己成長に対する意識の高さを裏づける項目に高い期待が寄せられている。今川¹⁰⁾が卒業生は母校を学びのより所としていると述べているように，上昇志向の高い本短期大学の卒業生も本大学に対して知識拡大の拠点としての役割を期待していることが明らかになった。地域と連携した研究や学習会など，建学の理念である開かれた

大学としての役割の具体的な実践方法について卒業生が示唆してくれたと考える。

一方，広く専門的な知識を得たことに誇りを感じている半面，実践的な講義内容を期待しており，就業上知識や技術にやや困っていることも明らかになった。同時に第1報では実践的でない演習項目が抽出された¹⁾。これらの現象は，卒業生が身につけた知識・技術を目の前にしている対象の反応に合わせて活用する能力に戸惑いを感じていると考えられる。したがって，第1報で明らかになった演習内容と合わせて実践能力を高めるための，講義，演習，実習のあり方を検討することが本大学の課題として明らかになった。

結 論

- 1．本短期大学卒業生が臨床の場で抱えている課題と誇り，本大学への期待を調査した。
- 2．卒業生は臨床の場で順調なプロセスを経て成長していることが明らかになった。
- 3．卒業生は他者との関係や社会における認知よりも，自分自身の成長を看護職に求めていることが明らかになった。
- 4．卒業生は看護職として働くことや本短期大学の卒業生としての誇りを強く感じていた。
- 5．実践能力をさらに高める教育内容の検討が本大学の課題と思われる。
- 6．本大学に対して，卒業生は自分自身がさらに成長するために知識拡大の拠点としての役割を期待していた。

参 考 文 献

- 1) 遠藤恵子，佐藤幸子，遠藤芳子，青木実枝，後藤順子：山形県立保健医療短期大学看護学科卒業生の動向（第1報） 卒業生の実態と演習に対する評価 ．山形保健医療紀要，7:49-56, 2004.
- 2) 臼井徳子，橋爪永子，二村良子：三重県立看護短期大学卒業生の動向．三重県立看護大学紀要，5:91-102，2001.
- 3) 山崎裕二，安達祐子，鈴木祐子：武蔵野赤十字高等看護学員および日本赤十字武蔵野短期大学の卒業生実態調査（報告1） 就業状況，進学・研修状況，転職・退職状況，職業意識，等について ．日本赤十字社武蔵野短期大学紀要，

- 8：113-125，1995.
- 4) 吉田時子，岩井郁子，伊奈侑子，太田喜久子，押尾祥子，堀内茂子：聖路加看護大学卒業生実態調査（第1報） 就業状況および卒業意識を中心に．聖路加看護大学紀要，11：13-22，1986.
- 5) 市江和子，園井陽子，羽場俊秀，小林尚司，佐藤真澄，他：日本赤十字愛知短期大学の卒業生の実態調査（その1） 就業状況・職業意識を中心に．日本赤十字愛媛短期大学紀要，12：83-92，2001.
- 6) 市江和子，園井陽子，羽場俊秀，小林尚司，佐藤真澄，他：日本赤十字愛知短期大学の卒業生の実態調査（その2） 進学・退職理由を中心に．日本赤十字愛媛短期大学紀要，12：93-106，2001.
- 7) 高梨一彦，三浦秀春，山内久子，一戸とも子，齋藤久美子，他：弘前大学医療技術短期大学部看護学科卒業生の追跡調査（1） 調査の目的と方法および卒業生の現状について．弘前医短紀要，23：1-38，1999.
- 8) 一戸とも子，木立るり子，石崎智子，高梨一彦，菊池広明：弘前大学医療技術短期大学部看護学科卒業生の追跡調査（2） 看護教育と学生生活への評価．弘前医短紀要，23：39-49，1999.
- 9) 鈴木智代：行政で働く卒業生（保健婦・保健士）の抱える課題と対処．聖隷クリストファー看護大学紀要，9：2-13，2001.
- 10) 今川詢子，長谷川真美，中山久美子，岡本佐知子，武田美津代：本学看護学科卒業生の動向調査 卒業生の短期大学部への要望．埼玉県立大短大部紀要，2：89-96，2000.
- 2003.10.31 受稿，2004.1.30 受理

要 旨

目的：山形県立保健医療短期大学卒業生が臨床の場で抱えている課題，誇り，母校への期待を明らかにする。

方法：先行研究を参考にして独自に作成した質問紙による調査を行った。調査内容は，就業上の困りごと，仕事はどんな意味を持つか，誇りに思うこと，母校に期待することである。

結論：就業上の困りごとでは，「あまりそう思わない」と回答する項目が多く，順調なプロセスを経て成長していることが明らかになった。自己の成長に仕事の意味を強く感じており，幅広い知識や専門的な知識，倫理的な配慮を身につけたことに山形県立保健医療短期大学卒業生としての誇りを持っていることが明らかになった。母校への期待としては，講義に実践的な内容を盛り込むことや，研究支援等であり，卒業生がさらに成長するための継続的な支援が母校の役割として必要であると思われる。

キーワード：看護教育，卒業生の課題，卒後の支援